



白桜小だより

平成28年度 9月号
中野区立白桜小学校
校長 宇賀神 佳子
平成28年 9月 1日発行

リオ・オリンピックに学ぶこと

校長 宇賀神 佳子

リオ・オリンピックが閉会し、パラリンピックに向けた準備が続いています。今回のオリンピックは、最後まで粘り強く立ち向かう試合が多かったためか、テレビ前の観戦もまるで選手と一緒に戦っていると錯覚するほど、ぐいぐいと引き込まれていました。重量挙げ、卓球、バドミントン、レスリング…、勝っても負けても、真剣に誠実に試合と自分に向き合い、全力を出し切った選手から発せられる言葉は、大きな試合を経験した者もつ重みがありました。男子体操など、たとえ失敗しても、これまでの厳しい練習が自分を支えている、その実感をもって自分を立て直し、次の試合に向かう姿は圧巻でした。



男子400mリレーに出場した選手たち

特に、男子400mリレーで、アンカーのケンブリッジ飛鳥選手が、ジャマイカのボルト選手と並び、ゴール目指して突っ込んでいく姿は、「すごい！すごい！」と言いながら見ていました。個人競技の段階では決勝進出も難しい状況でしたが、バトンをつなぐタイミングが流れるようで、スピードを全く落とさず、4人の力が倍加されていくようでした。

翌日の新聞には「チーム力」という見出しが躍っていましたが、バトンの受け渡しの練習を徹底し、「4人の息を合わせる」ところに、新たな力の生み出し方を見たような気がします。まさに「協働」です。ボルト選手が、日本選手に握手を求めてきた姿も印象的でした。

私たちが取組む教育の在り方も、こうした姿を追求しているのではないのでしょうか。一人一人の力を磨き上げるとともに、「互いのよさを引き出し合って、つなげていく」、そうした「チーム力」=「協働する力」を作り上げることがとても重要だと考えます。白桜小学校では、英語・外国語活動を通して、「人と関わる力」を育てようとしています。これが「チーム力」=「協働する力」の基盤となります。相手がどのように物事を捉え、どんな心情で居るのかを推測し、それらに対応するように、自分の考えを調整する、伝える、行動するなど、互いの意思疎通を図って進めることが基本となります。こうした「人と関わる力」は英語・外国語活動に限ったことではなく、例えば、親子の間で気持ちや思いを交し合うことでも十分に培われていくものです。こうした日常的な生活・学習場面での育成を大切にしながら、英語を活用したより多様性のある交流活動に発展させたいと願っています。

前期後半が始まりました。リオ・オリンピックに学ぶ事例を様々な活用しながら、子供たちの力を育んでいきたいと考えます。ご理解、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。